七×128

135
5
893

聽雨亭靜夥著

普通演說法

集山堂藏版

特29
858
No 17724/22

聽雨亭靜夥著

華嚴經演說法

集山堂藏版

目次

第一章　總論
第二章　良辯家たるの性格を論す
第一項　信用
第二項　熱心
第三項　温厚
第四項　論理
第五項　風調
第六項　機敏
第七項　豪毅
第三章　演說の種類及体裁を論す

第一項　政議体
第二項　裁判体
第三項　講義体
第四項　祝辭体
第五項　雜　体
第四章　演說の組織と論す
第一項　緒　言
第二項　分　類
第三項　事　實
第四項　論　旨
第五項　感　動
第六項　結　括
第五章　音聲の節調を論す
第一項　平　聲
第二項　成　聲
第三項　假　聲
第四項　音　調
第五項　聲　色
第六章　言語の用法を論す
第一項　用　語
第二項　詞　藻
第三項　語　勢
第七章　態度及四肢の運用を論す
第一項　正　体

第二項　變體
第八章　朗讀法を論す
第一項　朗讀法(文章)
第二項　背誦法
第九章　一般の注意
第一項　演說場整理する事
第二項　聽衆の人物を審にする事
第三項　諸大家の演說を聽く事
第四項　飲食を慎む事
第五項　聽衆の感動せしや否を識別する事

普通演說法

第一章　總論

言語の吾人々類に必要なる元是れ社交的自然の理勢にして今殊更に呶々辯明をるを要せざるなり而して今や政治文學科學を始め社會萬般の事物は駸々乎として增進發達し吾人の利益幸福を誘進するにも拘はらず一方に於ては害惡邪說の之れに伴隨して其進路を妨碍感ずるある又た勢ひの免かれざる所なりされは之れか是非得失を審覈し或は邪說を卻けて眞理を闡にし或は害惡を攘ふて公利を護り以て國家民人をして眞成なる利益幸福を享有せしむるもの其方法素より一にして足らずと雖とも能く人心を感動し輿論を喚起して其効を奏するもの未た言論の右に出つるものあるを知らざるなり故に今日に於て修辭の學を講し辯論の術を說く敢て無要のことならざるのみならず最も緊急缺くへからざるを信するなり況んや國會の開期は已業に明年

に迫れり言論社會亦た將に盛ならんとす宜なる哉世間辯論法に關するの書日を追ひ月に隨ひ陸續刊行の擧あるを見る然れとも其書たるや多くは泰西書の翻譯なるを以て如何せん東西事情を異にし彼れに有要なるもの我に無用のものあり一攫取て以て直に模範とすへからさる者あり偶々二三の著述なきにあらすと雖とも或は冗々に過き或は短に失し或は彼れに詳しくして此れに略するあり或は甲に載す所のもの乙に漏す所あり其取捨選擇宜しきを得さるを以て斯法を修めんと欲する者一書に依て其志を達する能はす其之れを達せんと欲せは必す數書を對照判讀し以て僅かに其志を得るのみ豈に遺憾の極ならすや然りと故とも之れを大成して完備ならしめ以て世人の欲望に副へんか其書浩瀚となり人々の購求に易からさるの患あり且つ夫れ法の區々鎖細に亘るは却つて煩雜を來たし學ふに便ならす習ふに利あらさるへし是を以て今世人の欲望を滿足せしめんと欲せは宜しく斯法の要照に就き冗を去り欠を補ひ簡約明瞭に解說し其書小部にして看るに易く學ふに煩ならさるにあり此の書素より世人の欲望を滿足せしむるに足らされとも他の數書に比しなは亦別に利益する所あるへきを信するなり

抑も言語なるものは往昔に在りては只各人相互の意思を通するに止り効用太た大ならさりしも社會進步し社交漸く頻繁に趁き其貴重欠くへかるさるを感得すると共に漸次此の機爾發達を計り遂に今日に在つては辯論演說は一の學科と稱せられ雄辯美辭は一の美術とまて稱揚せらるゝに至れり故に今日に於ては往昔の如く啻に各人相互の意思を通するを以て滿足したる單純の目的に止まらす自己の胸間に懷抱する所の思想を公衆に向つて吐露し聽衆の感動を惹起し遂に以て自己の所說に同意贊成せしむるを以てせりされは學術の講義にまれ政治の論議にまれ其他法廷の辯論、祝辭、頌讃より農、工業の勸誘に至るまで苟くも言語の機關に依るもの一として此の目的に外なる能はさるなり夫れ辯論演說の目的たる已に斯くの如く多數人士の同意贊成を得るにありとせは必すや其之れを得るの法を講究せさるへからさるや論を竢たさ

るなり然るに最も怪むへきは世人或い之れを排擊して曰く凡そ天下の事自由を以て善とす辯論演說なるもの必竟已れか意思を吐露するものなれは已れか言いんと欲する所を云ひ已れの言の尽くる所に至つて止む何んの妨かあらん徒らに區々たる法則に拘泥し或は言詞を修飾し或は音調を高下し或は首を搖かし態を動かすとを爲さんや演說の法たる猶ほ兵法の如し兵法の書多しと雖とも之れに依つて能く全勝を得たる者稀れにあるのみ且つ彼の趙括を見よ其坐して兵法を論するや其父と雖とも之れを難するを得さりしにあらすや然るに其趙將となり秦と戰ふに當りてや一敗地に塗れ數十万の兵士をして無殘にも坑中に陷死せしめたり是れ豈に兵法の罪にあらすして何そや辯論演說の法亦斯くの如きのみ何そ講究するに足らんやと夫れ然り豈に夫れ然らんや論者の言只其一を知つて未た其二を知らさるのみ余も亦兵法を以て之れを說かん夫れ戰は已れを知り彼れを知るを以て要となす而して臨機應變神出鬼沒の妙策奇計を用ひて以て全勝を收むるなり然れとも其平時に在つては士卒を訓練し隊を整へ陣を布くの法を演習せざるべからす孫吳の能く兵を用ゆる蓋し玆に存す而して孫吳は能く戰ひ能く勝ち後世兵家の尊崇して摸範となすに至れり是れ豈に兵法に熟達せるにあらずして何そや趙括の如きは只是れ一の死將のみ兵法を知るものと云ふべけんや宜なり一戰の下に敗死せるを夫れ辯論演說の事たる聽衆の心を得るを以て目的とするものなれば其聽衆を一瞥するや多くの部分は如何なる人々なるや或は書生なるか或は商人なるか將た勞働者なるかを觀察し而して其人々の常に學ぶ所聞く所見る所に依り其最も感じ易き點より論入せざるべからす是れ即ち兵法の所謂已れを知り彼れを知るものなり若し然らずして高尙深遠なる學說理論のみを說かば或る最少部分の人は沈默聽取すべしと雖とも多數の聽衆に對しては馬耳東風何等の感情をも興ふる能はざるのみならず若し佛法信者に向つて唐突神道の擴張を說き拜金宗徒に對して無暗に仁義道德を說かば其同意贊成を得ざるのみならず却て憤怒の念を起さしめ反對抗擊を求むるに至るべきや必せり其漸く聽衆をして已れの演說に耳

を傾けしむるに至らば所謂抑揚。頓挫。波瀾。照應。或い譬喩を用ゐ例証を擧け一捲。一縱。聽衆をして首を垂れ腕を扼さしめ滿場靜肅する所遂に論旨を總括し拍手喝采の間に檀上を降り滿場の贊成を得る者是れ即ち臨機應變の術と云ふべきなり而して演說の腹稿。組織。態容。音聲の節度。言語の用法等に至つては只平素の注意練習に在るのみ果して然らば辯論演說の法たる猶ほ將家の兵法に於けるか如く辯士論客の缺くべからざるものたるや疑を容れざるなり論者の說の如きは趙括の兵法と同樣採るに足らざるの論のみ試みに見よ卓說一世を聳動し明論天下を風靡するの學識を有し濟世經國の才能を抱くと雖とも辯論演說の法に拙劣ならんか其論理明晰ならす其主義貫徹せず聽衆をして五里霧中に彷徨するの思ひあらしめ遂に厭嫌して喧噪を生するに至るべきなり斯くの如くんは縱令舌を爛らし聲を枯らし縷々數千百言を重ぬと雖とも啻に寸効を見ざるのみならず一笑の下。雲散霧消に付せられ却て演者の才學をも併て毀損するに至らん豈に歎ぜざるべけんや古昔阿善の志士メルロー須波留多の公會堂に於て同國人の救援を仰がんとし憤然として檀上に上りしも惜らくは演說の法に熟せざりしを以て只一聲高く叫けんで曰「救へ諸君……我國を助け給へ」と然れとも其滿腔の精忠愛國の情は毫も須波留多人を感動せしむる能はざりしが恰も好し此時聽衆の中より年若き一人の秀俊演檀に顯はれたり是れ即ち阿善亡命の名士ペロピタスなりペロピタスは最とも熱心なる容貌を以て悲憤慷慨滔々たる雄辯を奮ひ奸黨の跋扈專横阿善政府の腐敗。國民塗炭の現狀を縷述し須波留多人の義心に倚り國家の顚倒を恢復せんことを請ひしかば須波留多人は其愛國の情に感激せられ遂にペロピタス等の志を助けて奸黨を郤け再ひ阿善の隆盛を見るに至らしめたり由是觀之各人個々演說法の必要なるは勿論苟くも國家の利害。政治の得失を論議する愛國の志士は常に演說法を講習し平素熟練を積み以て國家民人の利益幸福を進むべきなり其演士たる者の心得べき條件及講習すべき要項等は請ふ之れを下章に述べん

第二章　良辯家たるの性格を論す

第一信用　凡そ良辯家たらんと欲する者の具有すべき性格多しと雖とも其最も必要缺くべからざるものは信用なりとす試みに思へ平素放逸無頼の評ある者突然演檀上に上り一篇の道德論を揭け曉々道德を賞讃し斯の德の修むべく斯の道の養ふべきを說かんに其議論精密。論理明晰。辯舌流暢なりと雖とも聽衆は爲めに如何なる感情を起すべきか演說者が目的とする道德は果して奬勵勸誘するに足るべきか余は思ふ此の如きは却て聽衆をして不快の念を起さしめ敢て耳を傾けざるのみならず往々爪彈して演說を聞くに堪へざらしめんことを是れ偏に演說者か信用なきの一點に歸せざるべからず若夫れ博識高才。國家の憂ひを以て憂ひとなし政治家を以て自ら任する者濟世經國の卓說を演說するに當り聽衆の感情此の如く冷淡ならんか啻に演說者の不名譽のみならず抑も亦國家の不幸なり世の志士論客たる者宜しく玆に猛省すべきなり而して其信用を得んとするには如何なる所行をなすべきか余は敢て多言せず只其素行を修むるにありと言はんのみ

第二熱心　經驗實歷は學理上得べからざる妙機を會得するものにして其効太だ大なりとす而して演說に於て殊に其然るを見るなり夫れ學識該博にして音聲流麗。容儀優美なりと雖とも辯論の結搆整はずして或は前後重復し首尾對應せず或は冗長に過ぎ或は簡短に失し或は詞藻音調の輕妙のみを勗め或は態度手足の運用のみを事とし啻に枝葉の末枝に齷齪して折角本論の主旨は那邊にあるやを知らざらしむるに至るは最も遺憾の極にして往々未熟者の免かれざる所なり是れ全く演說に熱心なちず經驗熟練を積まざるに依るなり彼の古今有名なる演說家を見よ彼等は何れも熱心研磨の功を積みて遂に雄辯家の名を博するに至りしものにして天資雄辯なるにはあらざるなり彼のデモスゼニス氏の如きは其始めて公會場に於て演說をなしたる時大に失敗せしより慨然憤發し或は山谷に入つて音聲を鍛へ鏡面に向つて容儀を正し獨り自ら研究して怠らざりしかは後遂に有名なる演說家となり今に

於ても賞揚措かざるあり其他の演説家と雖も或は論理。言語の整頓。演説の結構等何れも刻苦研究せざるはなし殊にイワクラテス氏の如きは一演説を結構するが爲め十年の歳月を費したりとゆふ又以て其熱心研磨のほど思ひ知るべきなり彼の音聲語勢の强弱。擧動進退の機會。等に至つては多くは自然の經驗に依りて得る所のものなれは是れ等は暫く擱き第一に素行を修め第二に熱心研究して屢々活演場に臨み經驗を積み以て其蘊奥を極むへきなり學識智力の如きは演説家たるに於ては寧ろ是等の次きに置かざるべからざるなり

第三温厚　夫れ人情は常に粗暴。傲慢を厭惡して温厚。恭謙を愛するものなれは何人といへども欲くべからざる美德なれとも殊に演説者に於て其必要を感ずるなり何んとなれは人々の最も敬愛する優美なる容儀態度は温厚恭謙なる者にあらざれは能いざるを以てなり今若し敝衣乱髪。腕を扼し肩を聳かし傲然檀上に登り冷眼に滿場を睥睨して其口氣過激ならんか其議論や愷切。其辯論や流暢。其言咸な憂國の熱情に出で其人亦愛國の精神に富むと雖とも聽衆い已に其擧動言語の亡狀。過激なるを嫌み容儀の卑野なるを厭ふるを以て敢て其說を聞くを欲せざるべし殊に此の如きの擧動。言語を以てするときは心中餘裕なくして事理促迫し議論。偏頗酷薄に流れ一般聽衆の感を惡しくするのみあらず時に或は反對者の激昂を增さしめ却て自已の主義に不利を來たすに至るべきなり反之。温厚恭謙事を論ずる熱心懇篤にして恰かも至親朋友を保護し其禍災を防禦するの情を以て諄々として說き來り說き去るときは遂に多數の聽衆をして感動敬服せしむるや必然なり然れども餘りに温厚恭謙に過ぎ卑屈賤劣に陷りては其醜見るに堪へざるべけれは是等も亦最も注意すべきの一点なりとす

第四論理　世間博學多才の士其人乏しからず然れども其人にして一定の識見確說なからんか是れ所謂古人の糟粕を嘗むる一已の腐學者たるに過ぎされば亦言ふに足らざるなりされは社會に立ち一ケの門戸を張り博識多才を以て自ら居る者は宜し

く是非を分別し得失を判別するの識量なかるべからす況んや演説者たる者必す此の性格を具へざるべからざる頓勿論なりとす然れとも縱令事理の得失を判明するの識量ありと雖とも論理數岐に渉り條理明確ならざるに於ては轉た聽衆をして厭嫌を來たすべし是れ最も注意すへき点にして其之れを免かれんと欲せば常に論理學を研究し之れに依りて演説の結搆組織を講習すへきなり

第五風調　態度の端嚴、靜肅。音聲の流麗爽暢は亦演説者に缺くべからざる性格なりとす夫れ態度嚴肅ならざらんか聽衆の敬愛を失ふへし音聲流暢ならざらんか論旨貫徹せざるべし而して其結果は遂に聽衆の信用を失ひ倦怠を來たすや知るへきなり然れとも是等の事さる演説者自ら内に感動する所ありて自然外部の擧動に於て發顯するものにして故らに能く摸倣し得へきにあらず然るを徒らに修飾を事とし自ら求むるが如きの形狀ありては恰も虎を畫ひて成らす猫に類すると一樣却て風調を害するものなれは能々注意すべきなりとす而して音聲の如きは所謂天賦に屬するものなるを以て强ち流麗爽暢を望むべきにあらずと雖とも能く精練養成の功を積むに於てい決して達し得ざるとあらざるべし彼の唱歌を以て業とする者を見よ彼等の多數は或は天然の美質に出づるものありと雖とも然れとも皆な悉く然るにはあらざるべし而して其能く妙絶の域に達するもの只是れ平素の練習にあるのみ果して然らば苟くも演説に志ざす者些少の欠点に落膽抛棄するとなく鋭意憤進益々精練するまそ肝要なれ

第六機敏　夫れ演説なる者は只に眞理に適せしむるのみならず又聽衆の意好に投し彼等をして悅んて演説を聞かんとを欲せしめ以て漸次に已れか論旨を注入し遂に聽衆を感服せしめざるべからず是れ實際に於て大に關係ある要点なりとす而して其之れを察知するは即ち才智機敏の力にあらずんば能はざるなり今茲にシセロ氏が其子に向つて物語りし一節を拔萃して以て參考に供すべし

今茲に先つ伜に其性質を異にせる二個の人あり而して其一人は常に廉節を後に

して私利を先きにする野卑無識の人にして他の一人は何は偖て置きても廉節を先きにする有文開明の人なりと仮定すべし然るとき此の二種の人に向つて道德を說かんとするには如何なる區別を以てするを可なりとする乎則ち乙人種に說くには榮譽。廉節。功勳。信義。公道等之れを簡言すれば所謂都て有德の言を以て す可し而して甲人種に對しては利益。私情。貪吝の現象を寫出す可し啻之れのみに止まらず尙は且之れを誘ふに情欲の餌を以てせざるべからず夫れ情欲なる者は自ら欺きて常に天賦の良性を害し以て道德に敵する者なれとも然れとも尙は不善の人の爲めにハ熱心以て之れを求めらるゝ者にして彼れ不善の人は之れか爲め啻た廉節を顧みるに遑まあらざるのみならず今日決して缺くべからざるまとと雖とも尙且つ之れを後にせらるゝと往々之れなきにあらざるなり且つ夫れ人間なる者は善を求めんと欲するの念よりも寧ろ惡を避けんと欲するの念に切にして則ち廉節を求めんと欲するの情は寧ろ羞恥を免かれんと欲するの情よりも薄き者たるまとを記銘すべし試みに思へ古來廉節。名譽。功勳等の德を求むる者にして誰か能く夫の屈辱。羞恥。凌蔑。誹毀。等の不德を避けんと欲する者と一般の熱心を以てする者ある乎此に亦た稍々天性廉節に傾くの心あるも惜哉其惡習陋說の爲めに其性を害せられたる一種の人あり斯の如き人に對しては或は訓戒し或は敎諭する是れ汝が目的なり抑も善を求め惡を避くるの道を敎もるは汝が責任たるまとを記銘すべし今夫れ有文の人に向ひ演說するありとせん乎廉節名譽の主義を擴め最も熱心して人民の公利公安に屬すべき有德の道を唱ふべし然れとも若し又鄙野。無智。無敎の人民に向ひ演說するありとせん乎斯の如き人民に對しては利益。私情。蓄貯。情欲の事と困難を規避す可きの事とを以てすべし且つ加ふるに羞恥汚辱の醜狀を示し以て之れを避けしむべし何となれば凡そ人たる者好しや嚴然たる榮譽上には感觸を覺へずと爲すも苟くも汚辱羞恥の恐れを見て敢て其心を動かすとなしと云ふが如く又た如何んともすべからざる者

にあらざればなりと

諺に曰人を見て法を説くべしと讀者幸に今抄出したる一節を玩味せは大に得る所あるべきを信ずるなり夫れ有文廉節の人は已に私情貪吝の卑むべく避くべくして善事の施すべきを知了せるを以て直に其善事を擴張せんとを勸告奬勵すべしと雖とも野卑無識の者に在つては其眼中私情。貪吝の外なく廉節榮譽は却て迂遠の陋説となし敢て顧みざる者なれば是れ等の者に對して前者と同一の論法を以て説かば啻に其言の容れられざるのみならず益々反對の心を激發せしめ頑堅。執拗。遂に擠ふべからざるに至らん故に是れ等の輩に向つては先つ説くに利を以て其心を動かし而して眞成の利益富貴を得んと欲せは須らく貪吝私慾を避くべし然らざれば差恥汚辱を受け終に眞成の利益富貴を得る能はざるべしと云ふが如く最も利害の親易き点より婉曲に論及し以て善事を施かさんとを勸めなば或は幾分の稗益を見るに至るべきなり之れと同しく演説會場。書生學徒の充滿せるをも思はず喋々農商のことを説き實業家の集合をも計らずして高尚なる學理を説かば徒らに聽衆をして欠伸を催さしむるのみにして折角の明説も徒勞に屬するとあるべし演説者たらん者宜しく茲に省察すべきなり

第七豪毅　人若し優柔不斷自ら事を判決するの力なく他人を説服するの氣慨なく常に喘々焉として人の鼻息を窺ふが如きものは決して事を爲すに足らざるのみならず一たび他人の抗擊を受け批評せらるゝに逢へば忽ち心思錯乱。舉措所を失ひ周章狼狽爲す所を知らざるに至らん此の如き者惡んぞ能く公衆の面前に於て演説するを得べけんや夫れ廣濶なる會場。立錐の地なく聽衆如雲。或は「ノウ」と呼び「ヒヤ」と叫び拍手するものあり喝采するものあり喧噪沸くが如き所。嚴然檀上に屹立して知らざるものゝ如く滔々雄辯を奮ふ者豪毅果斷の氣象あるにあらずんば能はざるなり抑も人心の異なる面の如し誰れか已れに反對するものなからんされば數千の聽衆中自己の演説に抗擊を試み反對を表するは勢ひ免かれざる所なり若し天

下の人皆な己れと思想を同ふせば敢て演説するの必要なかるべく已に反對者ありて其抗擊に堪へ批評を忍ぶ能はずんば寧ろ最初より演説せざるの勝れるに如かざるなり殊に聽衆の過半は反對者たり粗暴家たるの場合に於て躊躇逡巡。左支右捂。姑息以て僅かに演説を了るが如き是れ或は熟練を積み經驗を蹈まざるに依るものあるべしと雖ども然れとも又豪毅果斷の氣象乏しきに依らずんば非ざるなりされば演説家たらんと欲する者は平素豪毅。果斷の氣象。活潑勇壯の性質を養成鍛練し眼中人物なく毀譽。褒貶。蟲聲を聽くの思ひをなし是れ等の細事を介意せず徹頭徹尾自已の信する所を演説し志操を變ずるとあるべからず若し此の如きまとあらば其名譽と信用とを損する鮮少にあらざるなり

以上述べたる所は良辯家たらんと欲する者の缺くべからざる性質にして其一を缺かんか即ち以て良辯家と稱するに足らざるなり就中信用と温厚との如きは最も演説者の品位を高め聽衆の敬愛を受くるものなれば演説者たるもの〻服膺して忘るべからざる要件あり其他の事に至りては多くは平素の練習を積み經驗を重ぬるに至らば自然に感得するものなれば課業の間隙わらんとき深思熟慮。研磨講習すべきなり尚ほ時と場所とに依り注意を要すべき條件なきにあらざれども开は後章會場整理を論するに當り大要を述ぶべければ茲には之れを畧し又讀者幸に諒せられよ

第三章　演説の種類及ひ体裁を論す

凡そ事物を講談論議するに當りては先つ其講談論議すべき種類と場所とに依り之れに恰好する所の体裁を用ゐて演説をなさゞるべからず即ち施政上に付き自已の意見を演説して同意を得んと欲せば須らく政談体を用ゆべく他説の謬妄を排擊して自已の主義を擴張せんとするには裁判体に據らざるべからず又た會議の席に臨まば會議体を以てし祭典式場に於ては祝辞体に倣ふ是れ咸な其種類と場所とに依つて生するものにして若し是等の區別なく何れの場所に於ても何事を論ずるに當りても一律一樣の体裁に據らざるべからずとせば演説者の困難は勿論。到底懷抱する所の議論を

充分に吐露すると能はざるこされば古昔に在りても宗教。祝辞。裁判。討論。等の區別をなし其演説の種類に依り此の數種の中適當の体裁に據り演説を爲したりき而して今日諸方に於て行はるゝ所の演説に付きて其体を考ふるに第一政議体。第二裁判体。第三講義体。第四祝辞体。第五雑体。の五種に區別せらるゝが如し依て今此五体に就き左に詳細論述すべし

第一政議体　政議体は政事上の事項に付き是非得失を論談辯議するの体にして又た會議体討論体とも云へり即ち政治上或る事件に付き自已の意見を公衆に吐露し多數人士の思想を感動し或は感情を喚起して自已の懐抱する意見に合同せしめ又は論議すべき原案或は問題あるに當り其利害得喪を論辯し多數會員の賛成を得て自已の所説を採用せしめんとするを以て目的とせり而して其説に賛成すると反對するとに至っては素より聽衆の自由なる認定に一任すべきは勿論こ然れども其目的たる多數の同意賛成を得んとするには機に臨み變に應して千變萬化。神出鬼没。或は態度の運用。音聲の節度。用語の變化。等より抑揚。頓挫。波瀾。呼應。操縦。譬喩。結括等に至るまで悉く混用し以て聽衆の意好に投じて全勝を占めざるべからずされば本体に於ては機智頓才の効力最も大なるものこ且つ政治の事たる其論議すべき事項夥多にして隨て其影響する區域廣濶なれば或る問題に付これが國是を定めんとせば必ず先づ理論に照らし次きに現時の實狀を察し猶ほ風俗慣行を考へ而して後其最も有益なり便宜なりと思意する所を以て本論の目的を定めざるべからず此の如く數多の原因より成立したるまとなれば其聽衆に向つて演説するに當り或は智力即ち判斷力に訴ふるとあり或は感情即ち德義に訴へざるべからざるとあり或は場合に依り本章に論する所の諸体を應用するとあり即ち自已と同主義の説を賛成する時は祝辞体の流麗婉曲なる音調を以て之れを賞讃し又反對者を攻撃し異説を辯駁するときは裁判体に據り誠實明確に論難し其他雑体の格を用ひて聽衆の倦怠を慰むる等殆んと全力を傾けて秘訣を尽さゞるべからず故に到底一定の法則

を定むる能はざるものとす而して此の体に就き最も必要なるものを擧ぐれば擧動快活音聲鋭利にして當るべからざらしめ音調の如きも抑揚頓挫を用ゐ始終活潑爽快なるを要す世の政治家たり又は議會の議員たる者宜しく茲に注意して研磨講究すべきなり若し此の体に熟達せは其他の諸体は敢て勞するに足らざるなり

第二裁判体　此の体は公事の訴訟。權利の論爭。罪犯の有無等に關し公庭に於て法律と証憑とに據り辯論審覈して眞証を檢擧し適當の判決をなさしめ又は自已の主義を主張して他の主義を排擊し眞理を發顯するを以て目的とす爲すものとす故に此の体は祝辞体の如く修飾を用ゐて感情に訴ふるを忌むものなれば情實を避けて道理に訴へ曲直は腦髓即ち知力の判斷に任せざるべからざるなり故に其態度は務めて嚴毅靜肅にし其言語音聲の如きも勇壯ならず温柔ならずして裡に鋭利を含み最も虚飾浮華を愼むべし且つ前項に述べたる機智頓才ならんよりは寧ろ誠意着實ならんことを要するなり

第三講義体　は所謂學術宗教の演說法にして專ら學徒又は信徒に對し事物の定理を說き宗道を明かにし人をして其道理の有る所を知らしめ又は書籍若しくは先哲の定義を解說し或は文義。字義。章句等を注釋し偶々自已の意見を加ふと雖ども只是れ經典の義理を闡明敷演し先輩の定說を補助擴張せんか爲め說明するに止り決して自身一已の說を主張すべからざるなり要するに此の体に於ては物理の發明。事業の進步。を勸誘し道德を發達せしめ風俗の壞敗を拯ひ害惡を矯め務めて後進蒙昧の輩を啓發誘掖するものにして事理の曲直を一時に爭ふが如きにあらざるなり彼の議政体の如きは已れを主として他を客となすものなれども此の体に於ては主客を顚倒せるを以て其辯法大に議政体と趣きを異にする所以なりされば言語。態度。等凡て温厚篤實を主とし叮嚀懇切を專らとし其目的とする所は聽衆の德義の感情若くは判斷智力の頭腦に訴へ其理非を悟らしめ得失を取捨せしめ惡を恐れ善に趁かしむるにあるなり

第四祝辞体　は國家の大典。祝祭日の祝禮。古賢先哲の祭典。若くは公益のため設立せられたる會館の式典。一已人の祝賀。吊祭等の席に於て爲す所の体裁なれは或は國家の隆盛を發揚し聖德を頌讃し或は大家の鴻業。偉勳。精忠。義士の節操を彰表し一は以て先人の雄圖偉績を永く後世に傳へ其美名芳功をして永遠に赫灼たらしめ一は後進者をして欽慕の念を發起せしめ古人の遺業を繼承せしむるを以て目的となすものなり其他會館の開場又は紀念式等の擧行若くは一已人の加冠。婚姻。壽讌等の祝賀。及ひ吊祭等皆前述の意に過きざるなりされは其演説や時ありて些少非難すべき点なきにしもあらざるべしと雖ども專ら其德を賞讃するにあるものなれば其態度は艶麗にし其言語を閑雅にし其發聲を清肅にし務めて修飾佳麗を要し始終嘆美の情を以てし人々の判斷力即ち智識に訴へしよりは寧ろ德義の感情即ち人の性情に訴ふるを以て趣意とせざるべからざるなり

第五雜体　は以上四種の体裁を混合したる一体にして豫め腹中考案なく適ま席上に臨み突然演説を爲さんと欲し即席に腹考を整へて演説するものなり此の体は多くは懇親會場若くは宴席に於て用ゐらるゝものにして直に其會場の光景と成立の性質とに依り目前の事情に恰好し現在の意向に適應するを要すと雖とも其考案たる咄嗟の間に結搆するものゆえに老練熟達にして機智頓才に富むの人か若くは天稟の別才あるにあらざれば常人の容易に爲し能はざる所なり故に世間或は即席演説を排擊して曰く即席演説は所謂天賦の特性を享けたる少數人士にあらざれば到底能し得べき所にあらずと又曰く此の能力の天賦に止まる乎將た人力の及ぶ所にあらざる乎少數人に限る乎一般人士の能くし得ざる乎は暫く之れを擱き只此の法を屢々使用するときは演説家をして自然慣習をなさしめ夫の思想を密にし論案を精ならしむることを怠らしむるに至るべしと然れとも前者の如きは天賦を名として自ら抛棄したるの論なれは敢て取るに足らざるは勿論後者の如きも必竟杞憂に過きたるの論のみ盖し豫め充分なる腹案又は筆案を定めて演説するものは幾分か已れ

か論案を特むるを以て自然注意を怠り或は已れか意思は論案のみに集り寸時も離るゝ能はざるを以て時と場合とに於て最も必要なる機會に乘じ變化する能はざるべし然れども即席演說を爲さんとする者にあつては先つ時。場合。其他全体の事情に着目し之れに恰好する所の演說をなすものなれば演說中と雖ども前後の順序。首尾の對應。等秋毫も注意を離るゝことなきものなれば論者の憂ふる怠慢は即席演說にあらずして却て論者の貴ぶ筆述法にあらんことを恐るゝなり且つ即席演說に熟達したる人は其演說するに當りてや心中常に綽々として餘裕あるを見るなり此法の如きは會議討論等に於て最も必要なるものなれば敢て陋說に迷ふことなく經驗熟練を積みて其奥を究め巧妙の域に達すべきなり

第四章　演說の組織を論ず

第一章以下に於て屢々陳述せし如く論辯演說の要は啻に自已の思想を吐露するのみに止まらず其最大目的とする所は聽衆の思想を感動せしめ若くは感情を惹起せしめ以て自已の主義と合同せしむるにあれは其演說をなすに當りては豫め演說の組織を工夫せざるべからず則ち先つ論理の主旨を正確にし企望の目的を確乎たらしめ然る後事實の例証を擧げ譬喩を用ゐ歷史又は他國の實例を引證し其順序を正し配置を巧みにして其演說の種類に依り五体の格例に倣ひ調音の緩急高下を節度し語勢。言語の强弱舒促を整裁し以て其組織を結成し其整然。秩然たること軍陣の配置。隊伍の整列せるが如くあらしめ決して錯雜すべからず若し其組織不整頓にして一たび論旨を誤らんか恰も軍隊の瓦解せしときの如く紛乱錯雜して其主意を貫徹すること能はざるべし故に演說をなさんと欲するものは先つ第一着に此の組織法を講習研磨せざるべからず即ち緒言。分類。事實。論旨。感動。結括。の六大綱目は演說を組織するの順序なりとす然れとも演說の事たる前章に於ても已に論述ゑたるが如く其種類に依りて体格を異にし或は場所。人物等に依り多少變更せざるべからざれば素より一定の組織に據る能はざるは勿論なれども然れとも又た一々之れが例格を擧ぐるは到底爲し

得べからざるごとあれば今此の六大綱目に付左に詳細論述すべきに依り玩味研磨し自己の智力と熟練とに依りて宜しく取捨折衷すべきなり

第一緒言　緒言とは演説組織の第一着歩にして所謂前置きなり此の緒言なるものは必竟演説をなすに當り先つ其大要を聽衆に了得せしめ其の注意を喚起するが爲め用ゐる者なり例へは條約改正の事を述べんと欲するときは先づ條約改正は目下の急務にして國權の消長民人の利害に大關係あるとあれは我國臣民たる者決して袖手傍着すべきにあらづ宜しく之れが方法を講せざるべからざるなり云々と云ふが如き是れなり此れ彼の講釋師落語家か述ふる如く常套語にあらざれば如何なる演説をなすにも必す其度毎に緒言を置くを要せず其之れを要する場合を擧ぐれば多くは其事柄の深因にして常に人の怪訝を抱ける問題或は其事の最も大切にして能く人の耳を傾くるの問題に付き演説を爲さんと欲する時則ち緒言を以て其演題の極めて不可思議に或は極めて大切にして之れを研究するに足るとの意を示し聽衆をして豫め其説を聞かんと願ふの念を發せしむる場合を云ふ則ち今日俗間に於て一種奇怪の名を得たる眞言秘密の法を説かんとするに當らば先づ之れが緒言に於て此法術中最も怪むべきもの多くして殆んど今日文明の世と雖ども之れを發見すると能はず有名なる理學者と雖とも其理のある所を發明すると能はざるを説き以て其法術の極めて不可思議千萬なるとを豫め聽衆の念頭に浸潤せしむるが如き或は論理に適合せる説なるも通常人の許さゞる議論の如き或は社會一般に誤認せられ眞正の意味を了解したるもの少なく又は世人の迷夢を警醒せんと欲し故らに人心に反對を試み或は一事件に就き其利害得失を辯論せんとするときは豫め其事件の起りたる履歴を前置して之れを聽衆に知らしむるが如き是等の場合に於ては豫め緒言を以て其論せんとする所の主旨を述べ置かざれば聽衆をして反對の念を起さしめ或は奇異の思をなし演説に意を傾けざるとあるべし以上の場合を除き通常一般。單純なる演説を爲すときは必しも緒言を要せざるのみならず時に或は單刀

直入本論を論議するを可とするとあれは演題の如何に依りて宜しく取捨すべきなり

以上述たる所に依り緒言の如何なるものなるやは其概畧を知るを得べし依て左に其緒言の場合に於て注意すべき條件を示すべし

(一)　擧動言語は沈着謙遜なるを要す

演説者の初めて檀上に登るや聽衆の視線は一に演者の一身に集り疾く其議論を聽かんとを願ふものなり然るに演者の擧動。傲慢亡狀言語。激烈急躁ならんか聽衆は心中其擧動を惡み演者を輕視し遂に演説を信用せざるに至るべし斯の如くなれば其論旨は如何に善良なりと雖ども其効なかるべし故に演者は可成謙遜の意を表し沈着なる言語を用ゐ聽衆の意を損せざる樣注意すべし

(二)　言語簡單平易なるを要す

緒言は只其論旨の大要を述ぶるに止り聽衆を感動せしむる場合にあらざれば其言語は冗長。婉曲に渉らざる樣にすべし然らざれば或聽衆をして倦厭を生せしむるの恐あるべし彼のデモスゼニース氏の如きは重に簡單なる緒言を用ひしと云へり

(三)　言語を整頓し主意に符合するを要す

緒言は議論の始めになすものなるを以て若し言語整頓せず前後齟齬し主意に撞着するときは聽衆をして本論も亦斯の如く不都合なるべきかとの念を生せしむるに至るべければ最も用意すべきとなり且つ緒言を用ゐんとするときは演説の論旨を考究し思想。十分整頓したる後緒言の如何を考ふべし然るときは自然に論旨に適當なる緒言を案出するを得べし

第二分類　本論の主意數項ある乎又は議緻密を要し錯雜を來たすの恐れあるとき豫め之れを分類種別して段落を畫するを以て便宜とす是れ一は聽衆をして論議する所の事項及ひ順序を知らしめ記臆を便ならしむるのみならす演説者自らも辯論

の容易なるを覺ゆべしされば簡單なる演說をなすに當りては是等の必要なきものなり

例へば善良なる政体を論ぜんとせば先つ其論ぜんとする所の政体を第一君主制。第二寡人制。第三民主制。第四君民共治制。と云へるが如くに分別し此の區別に就き一々其利害のある所を論究し最後に是等の得失を評論して善良なる政体を發見すべしと云へるが如き是なり

今分類に就き注意すべき條件を左に示すべし

（一）分類を爲すには畫然たる大區別を以てすべし

猶も分類を爲す所以のものも必竟論ずべき事項多きを以て或は紛乱錯雜せんとを恐れて異類を分別するものなれば其分類は畫然たる區別をなし決して甲乙相混交するが如きとあるべからず且其區別は自然の大分類に依り必要ならざる無益の細別を設けざるを要す何んとなれば是れが爲め却て論旨に錯雜を來たすべければなり

例へば法律中私法の大意を講ずるに當り民法商法の項目を列擧し尙ほ商事法の目を設くるが如し何んとなれば商事法は即ち商法の事なれば別に此れを掲ぐるの必要なければなり又右の場合に於て別に財産法なる一項を置くが如きも亦然り如何んとなれば財産法なるものは民法中の一部分なればなり

（二）分類は大部分より細部分に及ぼすべし

閑より繁に就き疎より密に入るは事物自然の法則なりとす故に分類の如きも必ず先づ其種類に依りて大別し而して又た其一種類の中に就きて小別すべし例へば法律を天法。人法とし人法を公私二法に分ち而る後又公法を萬國公法。憲法行政法。刑法。治罪法等の數項に小別するが如し斯の如くするときは聽衆の記憶に便にして且錯雜の憂なかるべきなり

（三）順序の論理的なるを要す

例へは國家と云へる事に付之れか解説をなすに當りては其組織せし原素の種類に依り土地。人類。政府の三項に分類するを以て適當とす然して其順序は如何に定むべきかと云ふに开は必ず論理法に依らざるべからざるこ如何んとなれば土地あつて初めて人類生し人類生じて初めて政府立つ玆に於て乎初めて國家を組成するものにして土地なくして人類生じ人類なくして政府のみ成立する所以なければなり故に論理的に依つて其序順を定めんとせば第一一定の土地を有すること。第二歴史上同一の人類なること。第三政府あること。の三項を示し此の順序に依り辯論する旨を豫告し置くべきなり若し然らずして論理に背反したる順序を定むるときは議論の接續を失し論旨錯亂して聞くに堪へざるべし宜しく考究すべきなり

(四) 分類の項目は簡明にして且つ本論の主旨を言ひ尽くすべきを要す

蓋し項目冗長なるときは聽衆の記臆に便ならず且つ本論の主旨を能く言ひ尽くすときは聽衆の之れに依つて豫め大体を知り得べければなり

第三事實　事實とは已往の實歴にして即ち本論の主意に干係ある事柄を陳述する者なり故に或は他國の實例を擧げ歴史の例証を引き古語確言を用ゆるも妨げなしと雖ども毫も議論を含蓄すべからざるなり本項の如きは最も裁判体に必要なるものにして態度言語等殊に謹慎せざるべからず今其必要なる條件を擧ぐれば左の如し

(一) 本論の主旨に背かざらんことを要す

事實の陳述及引証は必竟本論の主旨をして鞏固。確實ならしむる者なれば本論の主旨と枘鑿相容れざるの事實は啻に無要の事たるのみならず大に本論を妨ぐるとあれば是等の不都合なき樣注意すべし

(二) 態度嚴肅。言語明確陳述鄭重なるを要す

何体の演説に拘はらず凡そ是等の場合に於ては態度謹嚴にして誠意質實の容顔

を表はし言語は最も明晰にして音調を閑雅にし意味正確にして虚偽を交へす誤謬錯雑なき様實着鄭重に陳述すべし然らざれば聽衆の信用を得ると能はざるべし殊に裁判体に於ては最も此場合を必要とするものなれば能く注意し法廷に於て敬禮を失し輕譟に流れ判官の信用を失はざる様心懸くべきなり

(三) 眞理に適中するを要す

凡そ智力は事の理非得失を判別する頗る敏捷なるものなれば縱令其事實に誤謬なく本論の主旨に違はざるものと雖も眞理に背反せるものは聽衆の智力能く之れを判別して本論の眞價を損ずるに至るべければ決して陳述すべからざるなり

以上は何れも事實を陳述するに當り欲くべからざる要件なれども是れ皆正格に屬する者にして場合に依ては間接の説明又は比較的の形容を用ゐ直に聽衆の感情に訴ふるとあり今左に其場合を附記すべし

(一) 間接に説明すると

事件に依り直接に其事を説明するも左程聽衆の感動を起さゞるとあり斯の如き場合には其事件に關係ある他の事實を陳べ之れによりて其重なる事件の性質を推測せしむべし是れ徘諧者流か得意に使用する所の法にして彼の「古池や蛙飛ひ込む水の音」と吟したる一句は數十言を重ねて寂莫蕭索たる秋夜の實況を述ぶるも及ばざるのみならす通常言語を以て言ふ能はざる所の感動を起さしむるなり例へは加藤清正を猛勇なりしとを形容するに當り朝鮮に於て人を殺し家を焼き城を陷れ手から虎を打殺せりと説明するよりも之れを間接より説明して朝鮮に於て數百年の星霜を經たる今日に至るまで鬼將軍來れりと云ふときは稚兒の啼を止むるの習慣ありと云ふときは遙かに其猛勇なりしことを証明するに足るあり

(二) 他の事件と比較する事

事の大小輕重を比較して聽衆に示すときは大に感動するものなり即ち目下の事

件を説明するに他の事件を客となし其輕重の比較を取り以て目下の事件の重大なるとを示すにあり尤も此の場合に於ては他の事件は世人の能く知得せる事柄にして且目下の事件より輕小なるを要す彼の有名なる「シセロノ」氏が羅馬人民の殘酷なる死を遂けたるを憤懣したる言語に曰く羅馬人民を捕縛するは犯罪なり之れを毆打するは大罪なり之れを殺戮するは殆んと叛逆なり況んや今日之れを磔殺せしに於てをや之れを稱して如何なる名稱を付すべきかと知るべし事物の比較より非常の感動を與ふるとを其他人の功業を贊美するに當り此法を用ゆるを可とす

(三) 言外に意味を示す事

直接に事物の形狀を明にし其事に就き自已の感情を明示するとあり是れ通常の場合にして此の方法を用ゐるときは最も激烈なる言語を用い演者自ら熱心に其感情のある所を示し聽衆をして同樣の感情を起さしむるを要す然れとも場合に依りては事物の形狀を明言せず又之れに關して自已の感情を隱藏するとあり此の場合には可成言辭を平和にして實際の事柄より一層沈着ある舉動を示し務めて自已の感情を抑制して表示せざるを要す如何んとなれば斯の如き舉動を示すときは聽衆は之れが爲め却て反動を起し演者の思想に對し全く反對の極點に傾き無量の感情を與ふるものなればなり而して之れを爲すに當りては全く自然に出でたるが如き動作を示すを必要なりとす

第四論旨 本項は演說者が自已の胸間に懷抱する所の主義を吐露し其是非曲直を論究し直理を闡明啓發する場合にして演說中の一大主眼一篇中の神髓とも云ふべきありされば第一項より第三項に至るまでは本論に到着する準備にして第五第六の両項は本論の勢力を助長するものなり之れを要するに前後の諸項は或は先鋒たり後殿たり或は右翼となり左翼となり首尾相應し左右相輔けて以て本論の主義を確固ならしめ勢力を得せしむるに在り故に又た聽衆の同意贊成を得るも批難辯駁を

受くも演者の學識經驗を表はすも一に本論の主義如何にあるものにして所謂雌雄を決し勝敗の分るゝ所あると演者の最も注意し最も力を盡すべきは敢て言を俟たざるなり今左に本論に必要なる條件を掲示すべし

（一）論旨の事項は分類の順序に從ふを要す

分類は本項の構成如何を考察して論理的に依り豫め論議すべき事項の順序を示したる者なれは本項に於て論すべき項目は宜しく分類と同一にして且其順序を違へざるを要す即ち分類に於て第一に一定の土地を有すると第二に歷史上同一人民なると第三政府あるとを明示したるときは本項に於ても此の順序に據り論議すべきなり若し万已むを得ざる事ありて此順序を前後するときは判然其旨を聽衆に告知すべし然らざれば聽衆をして疑團を起さしめ此の点に付ては演者の持論なきやを妄想せしむべければなり

（二）明瞭なる議論を先きにすべきを要す

議論の順序は何人にも明瞭にして了解し易きものを先きにし了解し難きものを後に讓るべし例へは新說にして未だ世人の耳朶に觸れず容易に容れられ難き患ひある議論は暫らく之れを他の議論より端緒を開き婉曲。迂回其說を評論穿鑿するが如くにして漸次に其論旨に論及し其稍聽衆に信用せられたる時に至らば進んで議論を擴張すべし是れ最も注意すべき所なり然れとも或は議論斬新にして却て聽衆の聽管を傾むべき場合なきにしもあらざれば是等の場合に於ては最初より判然陳述するを以て得策とす蓋し是れ皆な其場合の如何に依るものにして玆に豫め其好惡を論定する能はざれば讀者幸に諒せらるべし

（三）普通の事より特別の事に論及するを要す

特別の事件若くは新なる出來事は凡て世人の視聽に入り易く且つ其事件に就き多くは一定の思想を有する者なれば是等直接の關係ある問題より思想を發し以て一般の主義に及ぶは最も容易なるものなり故に通常なれば此の法を以て可と

すれとも之れに反し特別の問題に就き世人の思想に反對して議論せんとする場合に於て直接に之れか反對を試むるときは聽衆は已れを信ずる厚きを以て益々反動力を起さしめ到底其論旨を貫徹すると能はざるべし故に是等の場合に於ては此の順序を顚倒し普通一般の議論を以て論辯を始め漸次自已の主義に論及すべし然るときは聽衆の感覺を惹起すると容易にして其目的を達するとを得べし例令は放蕩無賴の少年ありて之れに對して誡諭せんとする時直接に酒色の害て遊里に出入するの道德に背反するを以てするも敢て其効を見ざるのみならず或は却て激昂せしむるの恐れあるも若し之れを一般普通の議論即ち少年の後來に望みある所以を說き他人の信用を受け良友を得て國家有用の人となるべきとを說き遂に進んて品行を修め遊里に出入するの不可なる特殊の害惡に論及するときは其少年を誡むるに其効大なるを信ずるなり蓋し本項及ひ前項の如きは皆其場合に臨み機智頓才を運用するものなれは第二章第六項に於て論述せし所を參照せば自ら了得する所あるべきなり

(四) 論旨の要領を摘示するときは順序を顚倒するを要す

凡そ重要なる問題錯雜なる論理夥多なる理由を有する所の演說は充分論辯したる後其終りに於て再ひ議論の要領を摘採して概論するとあり是れ全く聽衆の記臆に便ならしむる者なれば是等は決して重復にはあらざるゝ最も此の場合に於ては其順序を顚倒するを要す如何となれば最後に陳述したる事項は聽衆の腦裏未だ暖かなるを以て之れを回轉して再ひ其概畧を陳述するときは益々記臆を確かめ且既に冷かならんとする最初の議論も再ひ鼓膜を動かし遂に聽衆の思想に入るべければなり

右にて本論に必要なる注意の條件を述べ了りたれども尙は此の他に反對說に對して答辯する場合に於て心得置くべきものあれば左に附記して以て參考に供すべし

(一) 駁議に對する答辯は前半の終りに爲すを要す

反對者の駁議に對する答辯を爲すには最も其位置を撰まざるべからず如何となれは最初より答辯を始るむ時は聽衆をして反對說は議論正確にして論理に適ひたるものなるを以て斯く最初より自已の弱点を辯護し自說を保護するなるべしとの疑を生ぜしむべく若し又其答辯を最後まで猶豫するときは反對者の駁議に答辯し能はざるものとの念を起さしめ折角の答辯演說も其効を失ふに至るべし故に是等の答辯は議論の中央に於てし時に依り或は前半に近寄るとも後半に讓るべからず然れども或る場合に於ては勢ひ答辯を最後に讓らざるを得ざる場合あるべし假令ば茲に故殺犯人あらんに或者は之れを論じて謀殺犯なりと云ふに當り之れが答辯を爲さんとせば必す其犯罪を構成する所の條件を逐一說明したる後にあらざれば謀殺犯にあらず故殺犯なりとの答辯をなすと能はざるなり故に此の場合に於ては議論中謀殺犯を以て論する者あれども取るに足らざることを述べ其詳細の答辯は議論の終りに至つて論破すべき旨を約し果して其終局に達したらば充分辯駁して或者の駁論は毫も取るに足らざることを答辯するを必要とするなり

(二) 政事上の答辯は間接なるを要す

答辯をなすに直接間接の二法あり而して學理上の事に就きては直接に駁論に反駁して其誤謬を攻擊するを可とすれども社會上及び政事上の事に付きては間接の答辯を以て便宜なりとす何んとなれば反對者の城壁と賴む所の駁論に就き理非を推究し遂に其結局に至つて全く眞理に背きたる臆測妄誕なることを証明するものにして所謂敵の謀畧に依つて敵を謀り彼れの劍を假りて彼れを殺さしむるの法なればなり茲に一例を擧げんに言論の自由を主張するに際し駁論者ありて可成言論の自由を檢束すべしと謂ふものありとせんに之れか答辯をなすには直接に之れに反對して言論自由の必要を說かんよりも寧ろ論者の議論を根據として之れを推究して思想の束縛より一歩を進めて身命財產の自由を剝奪し書を焚き

儒者を穴にし以て一國の自滅を謀る結局に論及し以て論者の迂濶を間接に示すが如き是れなり之れ最も便宜なる良法なりとす

第五感動　凡そ演說なるものは種類の如何んに拘はらす其目的とする所は何れも聽衆の感動に訴へ自己の主義に左袒せしむるにあり而して其所謂感動なるものに二種あり一を智感と云ひ一を情感と云ふ智感とは聽衆の智力を感覺に訴ふるものにして其演說をなすに當りては先つ議論の序順を整へ論理を正し言語を精撰し聽衆をして演者を信用尊敬するの念を起さしむるを要す是れ前數章に於て屢々論述したる所にして學理の闡明事物の審判等都て是非曲直を論辯して直理を發見する場合に於て用ゆべき者なるを以て之而して情感とは聽衆の性情に訴ふる者なれば時に或は事物の形容を示し悲哀の言語を用ゆるとあり是れ政事上殊に非常の場合に於て多數人心を感動憤激せしむるに於て大に効力ある者とす然れども智力と感情とは快に密着したる者なれば或は感情に訴へ遂に其影響を智力に及ぼすとあり或は智力に訴て遂に其影響を感情に及ぼすとあるが故に嘗然之れを分離して論ずるは甚た困難とす依て左に智情二力に訴ふるに必要なる條件を併せて掲載すべし

（一）感情に訴ふるの意を知らしめざるを要す

凡そ人の情として他人の指示を受くるを快しとせざる者なり故に演者にして始めより感情に訴へんことを明言し又は之れを擧動に示すときは聽衆は心中其無禮を憤り不平の念を生じ反對の結果を來たすべし若し然らずとするも聽衆は才學乏しくして眞理に依り智力の判斷に訴ふる能はざるが故に慢かに事實を構造し聽衆を愚弄煽動するものなるやの疑を生ずるに至るべし果して斯の如き事ある場合に於ては其演說は寸分も聽衆の感動を惹起する能はざるなり尤も智力に訴ふる場合は之れを明言するも敢て妨げなきなり

（二）時間の短きを要す

人の感情は限りあるものにして其極点に達したるときは長く其感情を持續すべ

きものにあらざるなり然るに若し感情を喚起するあとのみを務め時間長きに渉り過度の感情を起さしむるときは却つて聽衆の心神に痛苦を與へ遂に厭嫌を生ずるに至るべし故に時間を計り適當の時機を撰み平和沈着の動作に復し聽衆をして言外に感情を發動せしむるを要するなり

(三) 感情に適したる言語を要す

例へは悲慘の感情を惹起せんと欲するときは愁嘆の語を用ゆべく雄壯の感情を喚起するには爽快勇壯の語を撰ぶが如きを云ふ

第六結括　結括は全論を總括するものなれば言辞簡單。勇壯なるを要す若し結括冗長なるときは聽衆厭嫌して未だ演説を終へざるに雜沓喧譟して平穩に演説の局を結ぶと能はざるに至るべし然りと雖ども餘り簡單に過ぎ一言に論結し不意に演檀を下るが如きも亦聽衆をして不滿足の思ひなからしめ全論の價直を損するに至るべければ演説者たる者宜しく平素練習して其中庸を失はざる樣注意すべし

第五章　音聲の節調を論す

音聲は人間。天賦自然の響にして其響聲に清濁。美惡あるも亦人々の稟性に出づる者なれば人力を以て能く之を矯正する能ざる者の如し然れとも其種類によりて或は練習の効を積むに隨ひ濁惡。暗澁の音聲をして清美。爽朗ならしむると敢て爲し得がたきにはあらざるに如何んとなれば音聲なる者は之に高低緩急等の節調を賦し以て言語を爲す者にして而して其高低緩急を節度する所の音調なる者は只練習の効に依て熟達巧妙を得べければ今左に音聲の種類即ち平聲。成聲。假聲の區別を詳述すべし

第一平聲　とは稟賦の天性より發する所の音聲にして通常の談話若くは自由に發聲する所のものを云ふなり然れとも其音聲には自から清濁。美惡の差別ありて容易に矯正し難きものなり

第二成聲　は勉めて發生するものにして天然の平聲をして或は强く或は弱く或は高低或は緩急適度に節調を賦して使用するものにして專ら練習の効に由て成るもの

なり試みに見よ平常談話即ち平聲の時に於ては美音愛すべきも時に大聲を發し或は唱歌謠曲の如き成聲によりて成る音聲を發する時は平常の美なるに反し重濁枯渇人をして聽くに堪へざらしるものあり又た平常の談話は重濁幽微にして殆んと聽くを得ざるが如き微聲なるも公衆に向ひ唱歌謠曲を爲すに當つては大に其平常に異なる美聲を發し聽者を感動せしむるとあり是れ全く成聲は固有の平聲に據らずして專ら練習の効に由つて成るの實証にして則ち成聲は人力に由つて得べきも平聲は人力の能く爲し得ざるものなりとす而して其輕重如何を論せは無論成聲を以て重且貴しとせざるべからず何んとなれは公衆の面前に於て自已の思想を吐露し感情を惹起せしめんと欲せば必す成聲を用ゐざるべからざるを以てなり

第三假聲は成聲に由つて成るものにして英雄豪傑の音聲。飛禽走獸の啼音。吼聲より笙鼓。琴絃。等萬般の音聲を摸倣し以て聽者をして目前現物に接するの感を起さしむるものなり抑も假聲の効たる人心を感動せしむるに於て頗る勢力あるものにして彼の僧侶が名僧智識の事績を說き田翁野媼をして感涙を翻さしめ謠曲者が能く多情多恨の子女をして歔欷せしむるもの皆此の假聲の効力に由らざるはなし然るに今日に至るも未た演說者の之を爲すを欲せざる所以のものは從來之を摸し之を擬するもの徘優の假聲にわらざれば淨瑠璃。新内の文句に止り其事野卑にして其之を爲す者も亦下等人種なるが故に遂に之を擯拆して此有効須要の妙調を用ゐざるに至れるは誠に遺憾の極と云ふべきのみ若し天下有用の政治學たり博學通識たるの士談論演說等有益の事に轉用せは其効力果して如何ぞや而して其之を學ぶや素より容易なるにはわらざれども必竟練習の効に依るものなれば敢て得難きにわらざるなりされば政治家たり談論者たらんと欲するものは成假両聲何れとも欲くべからざるものなるを以て平素練習熟達して天晴れ有名なる演說家の名を博すべきなり

以上は只音聲の區別をなし以て其天然に出づるものと人爲になるものとを示したる

に過ぎず而して成假両聲に最も關係ある所の音調。聲色の二項は乞ふ之れを左に陳せん

第四音調は辯論の緩急。語勢の強弱に從ふて音聲の高低を節し音韻を調ぶるものなり而して其本源は成聲假聲の両聲より發したるものにして且此の両聲をして清美輕妙ならしむるは又此の音調の効にあるなりされば音調なるものは演說談論上最も必要欲くべからざるものにして若し音調整はざらん乎如何に高論名說ならんも語勢其度を得ず態度其宜しきを失ひ聽衆忽ち倦厭の情を發して聽くことを欲せざるに至らん果して斯くの如くならば如何なる高論名說も其効なかるべし而して其議論才學前者に及ばずと雖ども能く音調に熟達し語勢を助け態度宜しきに衷ふときは却て聽衆を感動せしむると他の學者輩の上に出つる者實際屢々之れある所なり然らば博識高才の士にして此道に通じ此法に熟し以て一たび名論卓說を吐かば聽衆焉ぞ感憤激發せざらん此に至つて初めて言論の効あるを知るべきなり

(一)音調の區別

音調とは強。上。平。去の四聲を節調するの謂にして語勢の強弱緩急に依り音聲を抑揚するものなれば語勢と密接の關係あるものなり故に其詳細は語勢の條下に論述するとおし本項に於ては只四調區別及び變化を述べ置くべし讀者乞ふ語勢と參照わらんことを

強調とは鍾鼓の響の如く其調甚だ高きにあらずと雖ども鏗鏘銳利にして強大なるものを謂ふ

上調とは其聲色甚だ剛強銳利ならずと雖ども高く四方に充滿磅湃するものを謂ふ

平調とは平常對話に用ゐる調なれば別に贅言せず

去調とは低微の聲色にて強調より下調の低聲に落る間の音調を謂ふものにして多く感嘆の場合に使用するものなり

（二）音調の變化

偖て言語中次第に高調に上るとあり是れ未だ一段の意志を尽さゞる際に用ゆるの調にして聽衆の注意を喚起し或は演説の主意を聽者の知識に訴ふる場合にして疑問又は希望の意を表はすものとす而して音調の低く下るものは段落の終尾にして演者の意志既に完きを告げ信用。確定又は命令を表はすものなり

凡そ言辞は第一疑問第二確定第三命令の三法より外に出でざるものとす例へば「汝は來るや」（一問）「我は來れり」（二問）「來れよ」（三問）の如きものなり

夫れ疑問は其意に同意なるや將た不同意なるや聽衆の思想に訴へざるを得ず故に其語尾をして高調ならしむべし然れども疑問法にして聽衆の思想如何に關せざるもの或は反語の如きものは語尾を低落せしむる洽も確定法と同一なりとす

確定法は演者の主意を臚列するに止まるとなれば其語尾の調をして低落せしむべし然れども時ありて其主意未だ完全ならず猶ほ之れを繼續せしめんとするあらば語尾を高く上るものとす

命令法は聽者の好惡に更に關するとなく演者の好む所を命ずるにあるを以て語尾を低下せしむべし而して其意の希望するに出づるものは高調を用ゆる時あり

とす

（三）語勢平坦なるときは音聲中庸なるを要す

前二項に於て述たる如く音調に高低あるは語勢の強弱に依るものにして決して音調の隨意に出づるにあらざるなり然り而して語勢の平坦なる場合にして平調を用ゆる時は其音聲は高からず低からず所謂通常の談話格に據るべきものとす世間或い平聲にては滿場聽衆に達せざるべき哉を恐れ故らに大聲を發する者あれども斯くの如くするときは喉筋を緊紮し呼吸切迫して長きに堪へざるのみならず演説中音聲枯渇して聽くべからざるに至るべし且つ縱令音聲を發揚せずと

も音調の節度宜しきを得ば琅々として滿場聽衆を搖曳せしむるに足るべきなり

（四）呼吸時間の遲速

發語の時間を伸縮するは自ら語勢に關係あるとなれば开は語勢の部に於て陳述すべし然れども演說中呼吸を繼かんとするときは必ず言語の斷れ目に於てし決して一言語の中間に於て爲すべからず且其遲速は一方に偏寄せず中庸を得するを要す如何となれば速に失すれば言語の明朗を妨害し遲きに偏すれは澁滯の嫌ありて聞苦しきを以てなり

第五聲色　とは牽。憂。歡。引。等の音聲にして言語の首尾に附屬して音調を助くるものなり即ち牽聲とは長く引き續くるもの憂聲とは人の憂情を發するものにして極めて軟柔にして且深沈なるもの歡聲とは歡呼快濶の發聲にして嗚呼の感嘆詞に於けるが如きもの引聲とは重に去調の韻にして嬝々として斷へざると縷の如きもの例へば講釋師などか深夜寂寥の狀を形容して遠寺の鍾ボーン引又は犬の遠吼へヒョーの如きものを謂ふなり

以上は音調を節度する規則の概畧を述べたるに過ぎず其詳細は語勢を論ずるに當り例を擧げて論述すべし

第六章　言語の用法を論ず

歐米洛國にありては所謂八品詞即ち名詞。代名詞。形容詞。接續詞。副詞。感嘆詞。冠詞。動詞なるものありて其言語の配置及び語尾附庸の作用に依て單復の數。過去。未來。現在の時を定め及び主格。物主格。楷級等の働きを分つと雖ども我國に於ては未だ一定の法則なく僅かにてにをは語尾の動詞。助動詞の配置に依て其作用を顯はせり而して今日の有樣を見るに支那學者は支邦の文法或は語格に依り西洋學者は又西洋の語學を習用し遂に數多の働詞を混用して益々錯雜を來たすに至れり斯の如き有樣なるを以て辯論演說をなすに當り聽衆をして充分感動を起さしむると甚だ至難なりとす是れ辯論社會の一大欠点にして誠に遺憾とする所なれども今俄かに之が改良を爲

し得べきとにあらざれば現今我國に於て混用せる諸種の用語を折衷して六種となし以て彼の八品詞に倣はんとす即起語。接語。轉語。代名詞。括語。嘆語及び後詞。動詞。助動詞是れなり

第一用語とは即ち前記九種の作用に依て單復の數より過去未來現在の時及主格物主格目的格楷級等の區別を現はすものとす則ち

(一) 起語とは發端の言語にして夫。且。蓋。凡。抑。等の言語を謂ふ

(二) 接語とは上下の意義を接續する言葉にして所謂接續詞なり即ち。何そ。故に。及び。所謂。豈。爲に。寧ろ。即ち。如何となれば。の類を謂ふなり

(三) 轉語とは上下の意義を一轉するの言語なり此語格は歐米に在ては凡て皆接續詞の部分に属するなり然れども便利上茲には之れを區別せり即ち其言語は然れども。而して。然り而して。夫然。或は。果して。然らば。若し。但し。只。況んや等なり

(四) 代名詞は上文の事理を指名し若くは事物を代表するの言葉にして我國言語の一体なり其言語は是れ。夫れ。茲に。彼。如斯。此。這。等を謂ふ

(五) 括語とは一段落の句意を綜括するの言語にして。要するに。之れを總るに。大抵。大約。大畧。一言以て之を掩ふ。等の言語を謂ふ

(六) 嘆語とは咏嘆の言語にして所謂感嘆詞なり吁嘻。嗚呼。噫。哉也。矣哉。夫噫。等の類を謂ふ

(七) 後詞とは名詞又は其他の詞に附庸し働詞。助働詞。と相待つて無量の意味を言ひ現はすものなり例へば「汝は來れり」と云へる詞中のはゝ即ち後詞なりとす

(八) 働詞とは談話中に在て名詞の働作を現はすものにして前例のりの如き是れなり

(九) 助働詞とは動詞に付加して其足らざる所を助成する詞にして過。現。未。の

時を精細に言顯はすものなり

例へは「擊テリ」と云へば現在を示し「擊タン」と云へば未來を示し「擊ナケリ」と云へは過去を示すか如く其テリ。タン。ケリ。の如き皆助働詞ならざるはなし

以上九種の語類は辯論中必要なるものなれば斯の如き語類を用ゆる時は勉めて音調を正くして發聲を明らかにするを要す若し此等の言語にして重濁或は暗澁なる時は上下の意義を混乱し又は切斷して其主意を顚倒する等のとありて聽衆をして意のある所を知得せしむる能はざるべし

右は只概畧を說示したるものなれば其詳細は專門の書籍に就きて研究すべし而して言語の用法上最も必要なるは詞藻。語勢及び前章に述べたる音調の三法とす今下條に於て詞藻。語勢の事に付論述すべければ熟讀して用法を講習せらるべし

第二詞藻は語格の体裁を撰擇するの法にして即ち言語の雅俗。詞辞の風趣。意味の深淺。語路の舒促。等を切瑳琢磨するものを云ふ然れども其言辞をして艶麗優暢ならしめんとせば或は爲めに冗長侈靡に流れて卓然たる生氣を失し達辞到詞は或は爲めに重復錯乱して却て自ら其意に掩ふことあり故に雕琢に過ぎて心骨を傷り或は修飾に過ぎて眞趣を失はざる樣注意すべし今左に必要の條件を示さん

（一） 普通の言語を撰むべし

演說を爲すには可成世間普通の言語を用ひ六ヶ敷漢語又は聞きなれざる言辞を用ゐざるを要す殊に最も惡むべきは自ら新規の言語を造り又は一語を分割し他字を附着して更らに二語とおす等は是れ迄使用し來れるものゝ外決して新に案出すべからず例へば利害を分割して一利一害と云へるに倣ひ頑固ある父兄を頑父固兄と云ふが如き是なり若し此の如き造語又は新規なる言語を交ゆるときは聽衆をして其意味の如何なるおとなるやを疑はしめ爲めに主意を誤り演說に不利を招くことあるべし注意すべきおとなり

（二） 外國語を用ゆべからず

外國語を用ゆるは彼國の事情を述べ又は新説を述ぶるに當り自國の言語を以て説明する能はざる場合等万止むを得ざる時の外決して之を使用すべからず若し猥りに之を使用するときは聽衆をして奇を好み洋學に長ずるを售るの嫌ひありて演説の價値を損すべし

(三) 卑野の語を用ゆべからず

下等社會に用ゆる言語其他野卑なる言語は一切之を用ゆべからず如何んとなれば斯の如き言語は聽衆をして不快の念を生せしめ爲めに其演説を冷聽し演説を卑み信用せざるに至るとあるを以てなり

(四) 一地方の言語を用ゆべからず

東北。西南。中國。等其地方により清濁の音。抑揚の調。を異にし又其地方により一種の方言なるものありて他方人の知らざるもの往々あり此音調言語は勉めて之れを避け一般普通即ち何人にも解し易きものを用ゐ一地方に偏すべからず然れども本項及び三項に述ぶる所は通常の場合を指したるものにして特別の場合即ち下等人民の現狀又は地方の狀況を述べ聽衆の感情に訴ふるに當りては却て効力ある場合なきにしもあらざるべければ其邊は其場合に臨みて宜しく取捨すべきなり

(五) 同音異義又ハ訓音類似の言語を用ゆべからず

同音異義又は訓音類似の言語を用ゆるときは爲めに聽衆を誤解せしめ彼のイヤの醫者を石屋と誤りたるか如く毫厘の差千里を誤るに至るべし故に養蠶と洋算。物産と佛參。廣濶と狡猾。等の同音異義又はケイクワンの警官と鷄姦。クワンリの官吏と奸吏。等の如き訓音類似の言語を用ゐざる樣深く注意すべきなり

第三語勢 とはもと意味の切迫急激なる時は言語を約め發聲を激にして其勢ひを強大にし又其意味の流暢緩舒なる時は音聲を緩にして其勢を優長にする等凡て其辯述する所の緩急に從ひ强弱其宜しきを裁して言語の勢ひを補ひ以て人心の感動を

惹起すの法〻故に前章詞藻の條下に述べたる語格の体裁。過。現。未。の序次等を正し平。上。去。入。の音調に依て同音異義。訓音類似の言語を分明に區別し勉めて清爽にし人をして聞き取り易く。解し易からしめ強弱。舒促。の勢に依て聽衆の感動を惹くものなり今語勢を區別して緩急法。調和法。上下法。強弱法。咏嘆法。長短法。平坦法。の七種となす

(一) 緩急法 は或は緩に或は急に言語を舒促し音韻を緩急して語勢を分明にするの法なり假令は四言。四句の語句を發するときは上の二言。二句は緩に下の二言。二句は急に云ひ緩急の音調を節用して以て意義を分明ならしむるが如きを云ふ

(二) 調和法 は緩ならず急ならず音韻の節調其宜しきを制し言語の意義を詳かにするものなり

(三) 上下法 は又昇降法とも云ふ即ち言語の音調を昇降し或は高く。或い低く。一言一句の發音を上下し以て其言語を明晰にし意義を瞭然たらしむる法なり假令は五言五句なれば上の二言二句は上調を用ひ中の一言一句は平調を用ひ下の二言二句は去調を用ゆるが如きを云ふなり

(四) 強弱法 は又抑揚法と云ふ即ち語音を抑揚して言辞の種類語格の區別を分明にして其意義を明瞭ならしむる而已ならず聽衆をして感激せしめ或は憂愁せしめ以て其感情を切にするの法なり假令ば六句の意義を表明せんに上三句は強く高く發揚し下三句は弱く低く抑促し以て強弱抑揚の節調音韻を區別して或は語氣を鋭利にし或は語路を緩舒にし一言一句毎に善く強弱の度を調理するものなり

以上の四法は專ら對句若くは事理を比較する語格又は章句を用ゆるものにて演説の發言中一も欠く可からざるものなりとす今其例を擧ぐれば「長安一片の月萬戸衣を擣つの聲」と云ふ一句なれば上の句は其語勢を緩にし低調若くは弱き聲にし

下の句は語聲を急にし上聲若くは強調を以て云ふが如し又「滄浪の水清まば以て吾纓を濯ふ可し。滄浪の水濁らば以て吾足を濯ふ可し」と云ふ對句なれば上一句の滄浪の水云々は上調にして語勢を急且強にし下一句は去調にして緩且弱にし以て其緩急。高低。強弱。の語勢音調の節用すべきなり

（五）　咏嘆法　は言語を以て言ひ現はすこと能はざるか如き場合に於て只一聲若くは聯聲の感嘆詞を以て其愛情。憎惡。憂愁。歡喜。等の意を表明するものにして所謂言外に無量の餘情を包藏するが如き場合にして聽衆をして長く感覺力を失はざらしめんとするものなり例へは「嗚呼今日我が東洋の大勢を見よ前途渺茫日暮れて道尙は遠し此の衰頽を如何せんや」と云ふか如きを云ふ

（六）　長短法　は上に述べたる緩急法と稍々其趣きを同ふし或は長く或は短く長短互用して語句を正し其意のある所を聞取り易からしむる法を云ふなり然れども緩急法は一音一言若くは聯聲の伸縮舒促よりして言語の諧韵を調べ以て語勢の寛嚴を制するものにして此法は一語一句に就きて只其詞を長短に言現し又は數語數句の音調。諧節。長短言制する者なり例へは鍾鼓の音を形容するの詞に鍾はゴン太鼓はドンと鳴ると云はんに只ゴンドンとのみにて長短の節調もなく音聲の諧節もなく云ひ放つ時は其聲の何物たるを辯識すると能はざるべし故に長短の諧節を用ひてゴーン又はドンと云ふが如く或は引き或は放ちて以て長短の區別を明かにするの類なり

（七）　平坦法　此の法は言語の調を凡て同音同節にして音聲を平易圓滑に用ゆるの謂なり即ち一句一語共に皆同一の音調を用ひて閑雅靜寂を旨とし專ら周到緻密に其事理を辨明するの法なり然れども言語中多少の抑揚緩急あるは自然の理にして之れをも必す同調同音ならしむべしと云ふにはあらず唯他の強弱緩急の抑揚法を避くるものにして例へは平聲なれば平聲の調を均くし成聲なれば均しく成聲の調を用ゐ假聲なれば假聲の調を同一にして其音調に依て聲色を均一

にするが如し故に上調なれば徹頭徹尾上調を用ゐ平調なれば始終平調を用ゐて變ずるとなく又他の聲調と混用するとなきものにして此の法は多く講義体。裁判体。の演說若くは辯論に使用するものなり

抑も文字なるものは音聲言語の符標にして一字一音を集めて以て一言一語を作り一言一語積んで以て一句一章と成り漸く積んで遂に一篇の文章と成り一則の演說と成るものなり今若し一篇の文章を作り其間或は上下の意義を聯接し或は一段の主意を結括し或は論旨を一轉し或は一句の間無量の意義を含み一語の間深遠の意味を藏し或は慷慨。悲歌。鬼神をして其壯烈に泣かしめ辛楚。哀痛。人をして酸鼻に堪へざらしめ或は忠貞。節義に感じて士氣を勃興せしむるもの必竟其句法を正し語格を練り助辭。轉語。を其間に點綴して以て光綵陸離。雲烟如飛の光景を文字の外。紙面の上に躍如たらしむるものゝ演說の如きも亦然り一則の演說。論理明確。議論卓絶。眞に一世を濟ひ百歲に垂るゝに足ると雖ども聽衆をして感憤激發せしむる能はざるもの是れ決して聽衆の聰ならざるにあらず演者が未た語勢音調に熟達せざるに依るのみされば其演說を爲さんと欲するに當りては先つ論理に依て議論の順序を定め詞藻を切瑳琢磨して閑雅優麗にし語勢の强弱緩急を考へて音調の抑揚舒促を整へ講習研磨以て檀上に臨まば其聲琅々として憂玉の音の如く或は鏘然として敲金の響きの如く抑揚。頓挫。波瀾。呼應。着々として音節に衷ひ忽ちにして龍跳り虎嘯き忽ちにして風雲慘澹聽衆をして感激。憤興。搖曳止む能はざらしむるに至るべきなり然らば音調。詞藻。語勢の三法は演說を組織するに於て欠くべからざる猶ほ文章の句法。語格。助辭。轉語に於けると同樣なれば常に講究研磨すべきは勿論平常談話の間と雖ども苟くも忽緒に付せず注意省察して自已の短所を矯正修習し漸次練習熟達して演說に辯論に其伎倆を顯はすべきなり

第七章　態度及四肢の運用を論ず

態度及び四肢の運用をなすは言語を以て能く言ひ顯はすと能はざる意味を態度又は

四肢の形容を以て現はし聽衆をして感動を起さしむるものなれば演說法中素より欲くべからざるものなり若夫れ演說中始終靜肅端正檀上に屹立せんか恰も木偶にして言語をなすの思ひありて更らに聽衆をして感激せしむると能はざるべし然りと雖も若し又た猥りに身体を搖かし手を舞はし足を躍らすが如き擧動をなすときは反て聽衆をして厭嫌せしめ演者を輕視するに至るべしされば態度四肢の運用は甚た難事にして一朝一夕能く習熟し得べきとにあらざれば只自然の運動（自已の胸裏の感動により不知不識擧動に形はるゝものを云ふ）に依り數十回の經驗を積み漸次練習熟達の効を重ねて始めて妙巧を得るものなれば一々詳述すること到達なし能はざる所なれども今其大略を左に記載して參考に供すべし

第一正体　態度及び四肢の運用を大別して正變の二体となすを得べし而して正体とは始めて演壇に上りたるとき等の場合にして衣服を頓整し体格を直立し面を正面に向け眼球を正位に一兩手は正しく腰部の兩脇に置き臂を少しく張りて腋間を開き勉めて肩部を背後にそらし胸部を前面に出だし兩足を蹈み揃へ又は右足を少しく前に斜形に出し寛裕誠實の容貌を示し以て嚴肅端正の容儀を整ふるを謂ふなり是れ獨り態度の正しきを現はすのみならず多量の空氣を肺部に吸引し自由に發聲せしめんが爲めなり

第二變体　は言語の强弱緩急等に依り機に臨み變に應じ時々其体格及び四肢の運用を變換するの態度にして其變化するや千差万別なるを以て固より一定の模範に依るべきにあらず今自然の法則に依り動作擧止を平調。上調。和調。と語勢の强弱。緩急とに依て區別すべし

（一）平調　の時は言語平和なるを常とするを以て態度も亦正体を旨とし温和實着の形狀を示すべし

（二）上調　の時は論旨。稍々激烈。勇壯にして語勢活潑慷慨の氣自から内に動く時なれば体格四肢の動作も亦自ら其外に表發せざるべからず而して斯く上聲の

四肢の形容を以て現はし聽衆をして感動を起さしむるものなれば演說法中素より欠くべからざるものなり若夫れ演說中始終靜肅端正檀上に屹立せんか恰も木偶にして言語をなすの思ひありて更らに聽衆をして感激せしむると能はざるべし然りと雖ども若し又た猥りに身体を搖かし手を舞はし足を躍らすが如き擧動をなすときは反て聽衆をして厭嫌せしめ演者を輕視するに至るべしされば態度四肢の運用は甚た難事にして一朝一夕能く習熟し得べきとにあらざれば只自然の運動（自已の胸裏の感動により不知不識擧動に形はるゝものを云ふ）に依り數十回の經驗を積み漸次練習熟達の効を重ねて始めて妙巧を得るものなれば一々詳述すること到達なし能はざる所なれども今其大畧を左に記載して參考に供すべし

第一正体　態度及び四肢の運用を大別して正變の二体となすを得べし而して正体とは始めて演壇に上りたるとき等の場合にして衣服を頓整し体格を直立し面を正面に向け眼球を正位に二兩手は正しく腰部の兩脇に置き臂を少しく張りて腋間を開き勉めて肩部を背後にそらし胸部を前面に出だし兩足を蹈み揃へ又は右足を少しく前に斜形に出し寛裕誠實の容貌を示し以て嚴肅端正の容儀を整ふるを謂ふなり是れ獨り態度の正しきを現はすのみならず多量の空氣を肺部に吸引し自由に發聲せしめんが爲めなり

第二變体　は言語の强弱緩急等に依り機に臨み變に應じ時々其体格及び四肢の運用を變換するの態度にして其變化するや千差万別なるを以て固より一定の摸範に依るべきにあらず今自然の法則に依り動作擧止を平調。上調。和調。と語勢の强弱。緩急とに依て區別すべし

（一）平調　の時は言語平和なるを常とするを以て態度も亦正体を旨とし温和實着の形狀を示すべし

（二）上調　の時は論旨。稍々激烈。勇壯にして語勢活潑慷慨の氣自から内に動く時なれば体格四肢の動作も亦自ら其外に表發せざるべからず而して斯く上聲の

時は眼瞼を開き左足を前に出し右手を揚ぐるを以て常とす

(三) 和調 は高尚の學理若くは宗教の妙理を說く時に用ゆるものなり而して言語平和を旨とする時に臨んでは右手又は左の一方を胸部に當て一方を腰部に置き滿面愛敬の情を含んて眼を會場の中心に置き叮嚀懇篤の意を表すべし

右に述ぶる所は只其大略に過ぎす其他四肢の運用に就き演者の心得置かざるべからざるものあり左に附記し置くべし

(四) 演說中偶々金額。又は物品の數量。其他の引例等を忘却したるときは右手を斜めに額上に當て胸部を前面に出して直立し忘却せし事項を考案するの狀を現はすべし

(五) 是非曲直を斷定し又は他說を抗擊し若くは誤謬を正し以て自己の論理の正確なるとを闡明せんとする場合即ち裁判体の演說を爲す時は右手を脇腹に付け腕をL形に折りて前面に出し指頭を斜めに運用して之を裁判するの意を現はすべし而して手指を運用するときは眼睛を終始其指頭の向ふ所に着け決して他を顧るべからず

(六) 両足の運用を述べんに両足と正しく眞直に蹈み揃ふるを以て普通の定則とするとも斯くの如きは到底久しきに堪ゆる能はざるなり故に両脚の間隙を適宜にして足趾を稍々外部に向はしめ而して一足をして他の足より少しく前に出し時々徐ろに交代せしむべし

演說中態度四肢の運用を爲し其演說する所と適合せしむるものは必竟聽衆の感情を惹き起すものなれば其一擧手一投足も深く注意し强て求めずして自然に出づる如くし始めて其妙用を致すに足るべきなりされば演者は其聽衆の模樣と場合とに於て斟酌すべきは勿論なれども概するに躰格は常に寬裕ならしめ決して輕躁の狀をなすべからず又顏色躰勢は其主意に適し喜怒共に其容を顯はし已れの身体に關しての運動は自重若くは他人を誘ふとを示し已れの身体より外部に對しては命令

若くは拒絶を表し開廣するの狀は羈束を受けざると廣く示すと滿足を告ると公明にするとを顯はし收縮するの容は節儉。貯蓄。聚斂。を示し上部に向ふて指すは未だ決せざると又は進歩せんと又は上に告ぐるととし下部に向ふて指すは既に決したると報道すると又は責任を示すものとす急に運動を止むるは疑ひあるか又は思慮を請ふときとし急に運動するは已の決意したると又は新に發明せしことを表し運動を廣くし且つ繼續するは大意を述べ若くは勇氣を示し自由を示す等に用ひ繼續せざるものは妨障あることとす体軀を嚴肅あらしむるは強固尊敬なることにて寛弛ならしむるは軟弱なるとなり遲き時は柔順なること速かなるは急激を表す等其他千變万化の作用あれとも之れを一々記し得べきあとにあらざれば以上の類例に依り宜しく取捨斟酌すべきなり

第八章　朗讀法を論ず

玆に演說に次き必要なるものあり即ち文章の朗讀法なりとす抑も演說なるものは其考案を先きにし其意を述ぶるに語音を發すれども朗讀法は其文章よりして其主意を顯はすものなれば常に精細に文章の接讀と主意の反應等に注意を下たさゞるべからざるなり而して朗讀法に二種あり朗讀法(文章)背誦(ソラヨミ)法とす今左に注意すべき條件を示すべし

第一朗讀法

(一)　朗讀せんとする者は其書類を左手にて保ち右手にて紙片を開き書類を平かに持ちて其面を掩はざる樣にし書類を高く捧けて首を下け又は斜めにして見ることなきを要す

(二)　發聲せんとするときは徐々に口を開き胸部を張りて靜かに大氣を肺間に充たすべし

(三)　一項の語毎に區別を正しくし互に關することなき章句を亂讀すべからず

(四)　書類のみを見詰め居るべからず其文を心に留め一章句毎に聽衆の方を周覽

すべし

第二背誦法

（一）衆人の前に立て暗記するの文章を背誦せんには急遽の容をなすとなく先つ一揖して靜かに大氣を鼻孔より深く吸引するあと両三回すべし之れ神經の鼓動を鎮壓するに頗る効あるのみならず音聲を發する又た容易なりとす

（二）背誦中に他の事物に感覺を起さず專一に其背誦する事にのみ就きて思ひを凝らし居るべし而して背誦終れば再び一揖して徐ろに退りべし

（三）背誦中は勉めて威儀容貌を作り妄りに手足を動かすべからずさり迚又凝固せし如くにすべからず從容として餘地を存するを良とす

第九章　一般の注意

以上章を分ち節を逐ひ辯論演説上必要の條件を例擧したりと雖ども猶ほ其他一般に注意すべき事項なきにあらず依て爰に特に本章を設けて補述すべし

第一　演説場整理の事

會場及演檀の準備等は瑣々たる一小事なるが如しと雖ども然れども其準備の善く整頓したると否とは大に音聲の通塞。難易。等に關し大に辯術の消長に關するを以て宜しく注意を加へざるべからざるなり

（一）演説會場中演檀と聽衆席とを區別し聽衆席は廣濶にして大氣の流通宜しきを擇むべきは勿論なれども演檀は聽衆席より少しく高き所に設け而して演檀の後部及左右は餘り廣濶ならざるを要す

若し演檀の周圍（前面は除く）廣濶に過ぎ又は戸障子等を開放してあるときは音聲四方に散消し邈漠として言語の節調明瞭ならざるのみならず其論旨をも聞き取り難きことあるべし斯の如くなれば聽衆の不滿は勿論演者も頗る困難を覺ゆべし故に演檀の後背を密閉し其左右も餘り廣濶に過ぐるときは屏風。襖の類を以て圍繞して音聲の漏洩を妨ぎ成べく音聲をして正面に反響せしめ會場前面に磅湃充滿せしむ

る樣注意すべし

(二) 演檀には一脚の卓子を備ふるは勿論なれども餘りに大きに過ぐべからず且卓子の上には必要なる書籍又は飲用水等の外決して載せ置くべからず若し演檀混乱して整頓せざるときは聽衆をして信用の念を薄からしむるに至るべし

第二 聽衆の人物を審にする事

公會場中數千の聽衆各々其職業を異にし思想を殊にするは勿論のとなれば各人各己の意好に適するの辯論をなす能はざるは言を竢たず然れども一般の事に關する思想に至つては其人種に依て稍々相近きものとす故に演説をなさんとするには先づ聽衆を通觀し如何なる部分の人聽衆の多數を占むるか又反對黨派の人物來會せるや否に注意し豫め之れを腦裏へ記臆し其意好を計て言語音調の强弱抑揚を節調すべし若し然らずして過激壯烈の言辞のみを以てするときは實着老成人の爲めに擯斥せらるべく又艶柔矯態のみを事とするときは青年活潑人士の信用を損ずべし

其結局延て全論の價値を失ひ反て自己の主義に不利を招くに至るべし

第三 諸大家の演説を聽く事

演説辯論法の經驗練熟にわるまとは已に屢々陳述したる所なれば今別に喋々するを要せざるべし而して爰に一の經驗にも勝るべきものあり即ち諸大家の演説を聽くこと是なり諺にも云へる如く自己の臭氣即短所は發見しがたきものなれども他人に於ては善惡共に見易きものなり故に屢々大家の演説を聽くときは自然に其理論の順序。語勢の强弱。緩急。音聲の抑揚。節調等を感得し大に利益を得るものなり然れども假令大家と雖ども一の性癖あるは免かれざる所なれば徒らに其聲色口調の奇癖を摸擬して其皮相を學ぶべからざるなり

第四 飲食を愼むべき事

演説前に過食し又は演説後に飲酒すべからず若し演説前に過食するときは腹中膨滿して發聲困難なるのみならず長く音聲を發するときは胃部を傷害し又發聲後直

に飲酒するときは必らず音聲を傷ふべし且つ演説中渇を醫するには宜しく白湯を用ゆべし從來冷水を用ゆるを例とすれともあは氣管を縮小するものなれば頗る發聲に害あるものなり古來我國唱歌謠曲者が冷水を用ひずして白湯を用ゆ是れ實驗上より得たるものなれば宜しく之れに倣ふべきなり

第五　聽衆の感動せしや否を識別する事

此の事たる亦演説者たる者の心得置くべきとなり何となれは其聽衆の感動を起せしや否やに關して演説の摸樣を變ずる場合なきにあらざればなり而して其之を識別するの法數種なるべしと雖ども要するに先づ聽衆の擧動を以てすべきなり

(一)　演説中聽衆の眼睛すべき演者の一身に注射し演者の一擧手一投足に隨ひ左右上下に聽衆の擧動を顯はすものは其演説に對し聽衆の感動すること最も深く最も厚き場合なりとす是れ辯術の上乘なるものにして屢々見る能はざる所なり

(二)　演説中聽衆沈默して滿場寂として聲なく聽衆の頭部は稍々底下し氣息喘焉眉宇窘蹙して恰も憂慮に沈みたるが如き狀態を現はすものは聽衆の性情重に德義上の事に就きて感動を惹き起したる者と知るべし是れ多くは宗教又は講義体の演説に於て見る所なり

(三)　聽衆皆な頭部を擡げ正眼に演者が擧動を熟視し其演説中慷慨悲憤の所に至り音聲高く言語鋭く語勢。活發爽快ある時に當り聽衆又た咸な切齒扼腕の狀をなし眼を張り肩を怒らし演者の擧動に應じ聽衆の擧動變ずるものは聽衆の感動稍々深く演者の精神。演説の論旨能く聽衆の心意に貫徹したる場合と知るべし是れ議政体の演説其社會上の事を論ずるに當つて見る所なり

大略此の如し之れを要するに第一類は智德兼備の雄辯家にして之れを得べく第二類は名望ある博識の能辯家にして之れを得べし第三類に至つては演者の資格中其一を缺くも敏捷豪膽にして辯舌巧なるものゝ容易に得らるゝものとす然れども演者若し之れに甘んじ自ら以て雄辯家を擬氣(キドリ)に至らば遂に眞成雄辯家の地位に達

すべからざるなり而して彼の拍手喝采滿場囂然たるが如きもの其外觀上より見れば公衆の感情を惹起したるが如しと雖ども未た以て眞誠ある感動を喚起したるものと云ふべからず演說者たる者宜しく自誠猛省愈々益々練習研究すべきなり

明治廿二年六月十五日印制
明治廿二年六月十七日出版

定價金拾五錢

編輯兼發行者　寺井宗平　本所區外手町十一番地寄留

印刷者　加藤榮吉　本所區外手町十一番地寄留

發行所　集山堂　下谷區西黑門町十四番地

印刷所　東京並木活版所

○東京並木活版所　ハ國會議場言論の有樣を其儘に寫し即時之を印刷するを請負ものゝ

○東京並木活版所　ハ國會開設と共に全世界に其雷名を轟せる憤發の活版屋ゝ

○東京並木活版所　ハ萬國併呑世界第一ゝ勉强する活版屋なり

○東京並木活版所　ハ活版石版其他諸印刷美麗ゝ調製して且價廉なり

○東京並木活版所　ハ世界ゝおゐて印刷と名の付くものはなんでも御請負致すなり

○東京並木活版所　ハ老練なる職工數名を雇入れ何程六ヶ敷ものゝても易く調製する事を得る活版屋なり

國會印刷所　東京並木活版所

○東京並木版活所　ハ數名の職工を雇入れ置事なれは定期刊行ものは不申及何程御急きの者と雖共手配して御間に合せるゝ

○東京並木活版所　ハ學藝の雜誌及小說雜誌等美麗ゝして請負時日に相違なし

○東京並木活版所　ハ監獄書籍出版よりして成立つたる活版業なれば殊更に監獄に關する書籍はたとへ飜譯書といへとも速に印刷に付する事のできる活版屋なり

○東京並木活版所　ハ起業以來日增に盛大に相成候既に昨年來本所外手町に分舍を設け爾後ABCの二十六字の如く順にA分舍B分舍と稱して東京市中に分舍を二十六分舍を設くる見込なり

○東京並木活版所　ハ諸君之御依頼に滿足をさせる一種特別他に類のなき憤發の活版所なり

6x123

特29
858

076815-000-5

特29-858

普通演説法

聽雨亭　静処／著

M22. 6

DAB-0173